

# 2017 年度 研究所事業報告書

研究所名	人間科学研究所
研究所長名	松原 洋子

## I. 研究成果の概要

本欄には、研究所・センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、研究所総合計画(5 ヵ年)および 2017 年度重点プロジェクト申請調書に記載した内容に照らし、項目立てなどをおこなうできるだけわかりやすく記述してください。

### 1. 重点プロジェクトの推進

3 つの重点プロジェクトそれぞれに、発展的な成果がみられた。「法と対人援助」プロジェクトでは、サブ・グループが中心となり、2017 年度に採択された R-GIRO 第 3 期拠点形成型研究プロジェクト「修復的司法観による少子高齢化社会に寄り添う法・社会システムの再構築」と、引き続き緊密な連携を取りつつ研究を推進した。また、「対人援助の人間科学 (基礎研究)」「対人援助の人間科学 (応用研究)」両プロジェクトを横断して形成されたグループが、同じく 2017 年度に採択された R-GIRO 「学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」との連携を継続し、こちらも若手研究者の雇用や研究ネットワーク形成など重点プロジェクトに関わる堅固な研究基盤を構築した。

2017 年 12 月には、研究所主催で立命館大学男女共同参画推進リサーチライフサポート室の特別協力を得て、研究所年次総会を兼ねた公開シンポジウム「研究者のライフ・イベントとワーク・ライフ・バランス」を午前・午後にわたり開催した。今年度は研究活動の男女共同参画という大学共通の重要課題をテーマに掲げ、リサーチライフサポート室とも連携したため、学内外から多くの熱心な参加者を得た。さらに上記 R-GIRO2 拠点・生存学研究センターと協力して例年同様に研究成果報告会であるポスターセッションを昼休みに開催し、専門研究員や大学院生等の若手研究者を含む研究所関係者と学外の研究者・実務家の活気を伴ったネットワーク形成の場となった。

### 2. 学術誌の刊行・メディア媒体を使用した発信

『立命館人間科学研究』2 号を刊行し、同時に全文を Web 公開した (一部予定)。掲載論文合計 15 本のうち、12 本は外部査読者を含む 2 名以上の査読を経たものである。また研究成果の社会的発信を促進するため、日英両言語により、イベント案内や「人間科学のフロント」(研究紹介ページ)、ソーシャルメディア等 Web 上で積極的な情報発信を行った。

### 3. 若手研究者の育成

研究所重点プログラムの資金を活用した競争的研究資金「萌芽的プロジェクト研究助成プログラム」は、若手研究者を中心に公募し、6 件を採択した。また、プロジェクト室をはじめとする研究資源を若手研究者を中心に配分し、研究基盤の形成を大いに支援した。結果、他大学教員へ 4 名、本学の任期付きポストへ 2 名の就職を実現させた。

### 4. その他研究の展開

重点プロジェクト以外の研究プロジェクトもまた、意欲的な活動を行った。京都市ユースサービス協会とのユースワーカー養成に関わる共同研究の進展はその代表的な例である。また、介護殺人、高齢者運転事故、電子図書館など時事問題に絡んだ研究がメディア等から注目・引用・参照されるなど、社会から注目・評価されたことも特筆したい。

## II. 拠点構成員の一覧

本欄には、2018年3月31日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員協力研究員等の構成員を全て記載してください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③学振特別研究員(PD・RPD)、④博士後期課程院生・一貫制博士課程3回生以上に在籍する院生

役割	氏名	所属	職位
研究所長・センター長	松原洋子	先端総合学術研究科	教授
運営委員	中村正	産業社会学部	教授
	松田亮三	産業社会学部	教授
	山本耕平	産業社会学部	教授
	岡田まり	産業社会学部	教授
	土田宣明	総合心理学部	教授
	谷晋二	総合心理学部	教授
	サトウタツヤ	総合心理学部	教授
	矢藤優子	総合心理学部	教授
	安田裕子	総合心理学部	准教授
	若林宏輔	総合心理学部	准教授
	村本邦子	応用人間科学研究科	教授
	増田梨花	応用人間科学研究科	教授
	美馬達哉	先端総合学術研究科	教授
	岸政彦	先端総合学術研究科	教授
	森久智江	法学部	教授
稲葉光行	政策科学部	教授	
学内教員 (専任教員、研究系教員等)	竹内謙彰	産業社会学部	教授
	野田正人	産業社会学部	教授
	小澤亘	産業社会学部	教授
	津止正敏	産業社会学部	教授
	櫻谷真理子	産業社会学部	教授
	大谷いづみ	産業社会学部	教授
	石倉康次	産業社会学部	教授
	斎藤真緒	産業社会学部	教授
	岡本尚子	産業社会学部	准教授
	春日井敏之	文学部	教授
	湯浅俊彦	文学部	教授
	常世田良	文学部	教授
	北出慶子	文学部	教授
	星野祐司	総合心理学部	教授
	八木保樹	総合心理学部	教授
	服部雅史	総合心理学部	教授
	北岡明佳	総合心理学部	教授
	廣井亮一	総合心理学部	教授
	山本博樹	総合心理学部	教授

		宇都宮博	総合心理学部	教授
		岡本直子	総合心理学部	教授
		東山篤規	総合心理学部	教授
		中鹿直樹	総合心理学部	准教授
		林勇吾	総合心理学部	准教授
		三田村仰	総合心理学部	准教授
		澤野美智子	総合心理学部	准教授
		荒木穂積	応用人間科学研究科	教授
		中村隆一	応用人間科学研究科	教授
		吉沅洪	応用人間科学研究科	教授
		団士郎	応用人間科学研究科	教授
		立岩真也	先端総合学術研究科	教授
		松本克美	法務研究科	教授
		斎藤進也	映像学部	准教授
		山浦一保	スポーツ健康科学部	教授
		荒木寿友	教職研究科	准教授
		山口洋典	共通教育推進機構	准教授
		朝野浩	教職教育推進機構	教授
		藤本学	教育開発推進機構	准教授
		堀江未来	国際教育推進機構	教授
		早川岳人	衣笠総合研究機構	教授
		開沼博	衣笠総合研究機構	准教授
		渡辺克典	衣笠総合研究機構	准教授
		和田有史	理工学部	教授
		對梨成一	文学部	助教
		田村昌彦	文学部	特任助教
		村上嵩至	文学部	助手
		春日秀朗	文学部	助手
		織田涼	文学部	助手
		土田菜穂	総合心理学部	助手
		廣瀬翔平	総合心理学部	助手
		中妻拓也	総合心理学部	助手
		京屋郁子	総合心理学部	特任助教
		都賀美由紀	総合心理学部	特任助教
		吉田容子	法務研究科	客員教授
		平岡義博	衣笠総合研究機構	客員教授
		茂野賢治	教職教育推進機構	嘱託講師
学内の若手研究者	① 専門研究員・研究員	川端美季	衣笠総合研究機構	専門研究員
		相澤育郎	R-GIRO	専門研究員
		金成恩	R-GIRO	専門研究員
		山崎優子	R-GIRO	専門研究員
		川本静香	R-GIRO	専門研究員

	孫怡	R-GIRO	専門研究員
	肥後克己	R-GIRO	専門研究員
	神崎真実	R-GIRO	専門研究員
	妹尾麻美	R-GIRO	研究員
	山田早紀	R-GIRO	研究員
② リサーチアシスタント	-	-	-
③ 大学院生	中田友貴	文学研究科	博士後期課程/JSPS 特別研究員 DC
	北村文乃	文学研究科	博士前期課程
	星田雅弘	文学研究科	博士前期課程
	連傑濤	文学研究科	博士前期課程
	黄信者	文学研究科	博士前期課程
	土元哲平	文学研究科	博士前期課程
	汪 為	社会学研究科	博士後期課程
	山中恵利子	社会学研究科	博士後期課程
	小嶋理恵子	社会学研究科	博士後期課程
	金森京子	社会学研究科	博士後期課程
	江頭典江	社会学研究科	博士後期課程
	松元佑	社会学研究科	博士後期課程
	富井奈菜実	社会学研究科	博士後期課程
	大倉一紀	社会学研究科	博士前期課程
	敖惟芸	社会学研究科	博士前期課程
	鈴木晶斗	法学研究科	博士後期課程
	ヨン・スビン	法学研究科	博士後期課程
	鳥取直子	応用人間科学研究科	修士課程
	横井風音	応用人間科学研究科	修士課程
	河上美樹	応用人間科学研究科	修士課程
	平松祐佳	応用人間科学研究科	修士課程
	武居樹	応用人間科学研究科	修士課程
	岡田紗弥香	応用人間科学研究科	修士課程
	池永弥生	応用人間科学研究科	修士課程
	中塚優介	応用人間科学研究科	修士課程
	麻生祐貴	応用人間科学研究科	修士課程
	生田祥子	応用人間科学研究科	修士課程
	合川茉莉花	応用人間科学研究科	修士課程
	石田育子	応用人間科学研究科	修士課程
	小山田真理子	応用人間科学研究科	修士課程
	安孝淑	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	坂井めぐみ	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	笹谷絵里	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
佐藤伸彦	先端総合学術研究科	一貫制博士課程	
伊藤京平	先端総合学術研究科	一貫制博士課程	

	南大貴	応用人間科学研究科	修士課程
	古谷美穂	応用人間科学研究科	修士課程
	目黒朋	社会学研究科	博士後期課程
	福田瑞穂	応用人間科学研究科	修士課程
	野口有里恵	応用人間科学研究科	修士課程
	鈴木航平	応用人間科学研究科	修士課程
	神戸希	応用人間科学研究科	修士課程
	三宅結佳	応用人間科学研究科	修士課程
	川島英輝	応用人間科学研究科	修士課程
	堀内悠	応用人間科学研究科	修士課程
	山田翔大	応用人間科学研究科	修士課程
	何エンキ	応用人間科学研究科	修士課程
	北川理沙	応用人間科学研究科	修士課程
	近藤優佳	応用人間科学研究科	修士課程
	伊東香純	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	④ 日本学術振興会特別 研究員(PD・RPD)	-	-
-		-	-
その他の学内者 (補助研究員、非常勤講師、研究 生、研修生等)	奥野景子	応用人間科学研究科	研修生
	井篠和之	応用人間科学研究科	研修生
	伊藤綾子	文学部	学士課程
	吉田裕香	文学部	学士課程
	朴希沙	心理・教育相談センター	職員
	山崎校	文学部	非常勤講師
	吉田甫	文学部	非常勤講師
	大野静代	産業社会学部	非常勤講師
	森重拓三	産業社会学部	非常勤講師
	佐藤嘉一	産業社会学部	名誉教授
	斧原藍	R-GIRO	補助研究員
	東城義則	衣笠総合研究機構	補助研究員
	青山睦実	文学部	学士課程
	松川友紀	文学部	学士課程
客員協力研究員	浜田寿美男	衣笠総合研究機構	上席研究員
	由井秀樹	衣笠総合研究機構	客員研究員/JSPS 特別 研究員
	笹倉香奈	衣笠総合研究機構	客員研究員
	與久田巖	衣笠総合研究機構	客員研究員
	上村晃弘	衣笠総合研究機構	客員研究員
	破田野智己	衣笠総合研究機構	客員研究員
	古川心	衣笠総合研究機構	客員研究員

	乾明紀	衣笠総合研究機構	客員研究員
	高山仁志	衣笠総合研究機構	客員研究員
	荒木晃子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	中西真	衣笠総合研究機構	客員研究員
	松下健	衣笠総合研究機構	客員研究員
	高山一夫	衣笠総合研究機構	客員研究員
	松島京	衣笠総合研究機構	客員研究員
	棟居徳子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	村上慎司	衣笠総合研究機構	客員研究員
	植村要	衣笠総合研究機構	客員研究員
	吉田一史美	衣笠総合研究機構	客員研究員
	荒木美知子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	津幡法胤	衣笠総合研究機構	客員研究員
	ポーター倫子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	村本詔司	衣笠総合研究機構	客員研究員
	石川真理子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	高橋伸子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	戸名久美子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	加藤知佳子	衣笠総合研究機構	客員研究員
	孫琴	衣笠総合研究機構	客員研究員
	宮裕昭	衣笠総合研究機構	客員研究員
	安井美鈴	衣笠総合研究機構	客員研究員
	破田野智美	衣笠総合研究機構	客員研究員
	Wu Weili	衣笠総合研究機構	客員研究員
	山崎まどか	衣笠総合研究機構	客員研究員
	西川大輔	衣笠総合研究機構	客員研究員
	河口尚子	衣笠総合研究機構	客員研究員
その他の学外者	大川一郎	筑波大学	教授
	木戸彩恵	関西大学	准教授
	西田朗子	大阪医療福祉専門学校	講師
	手島洋	県立広島大学	専任講師
	大原ゆい	大谷大学	講師
	中家洋子	大阪人間科学大学	准教授
	首藤祐介	広島国際大学	講師
	福田茉莉	島根大学	助教
	土屋葉	愛知大学文学部	准教授
	水月昭道	宗教法人 西光寺	代表役員

	伊藤綾香	愛知教育大学	非常勤講師
	伊藤葉子	中京大学現代社会学部	准教授
	後藤悠里	障害学研究会中部部会	運営委員
	時岡新	金城学院大学国際情報学部	准教授
	川嶋伸佳	京都文教大学	特任講師
	長井徹夫	京都市左京区地域介護予防推進センター	-
	三角良	老人福祉・介護保険総合施設 市原寮	-
	今村和子	-	-
	小田博子	-	-
	片桐直哉	-	-
	吉村昌子	-	-
	Diana Bast	National University of Ireland Galway	PD
	井上和哉	早稲田大学大学院人間科学研究科	博士後期課程
研究所・センター構成員 計 160 名 (うち学内の若手研究者 計 60 名)			

### Ⅲ. 研究業績

本欄には、「Ⅱ. 拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。(2018年3月31日時点)

1. 著書							
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1	中村 正	犯罪被害者と刑事司法(シリーズ刑事司法を考える第4巻)	分担執筆	2017年9月	岩波書店	指宿信他編	254-275
2	松本 克美	宮澤節生先生古稀記念・現代日本の法過程・上巻	共著	2017年5月	信山社	上石圭一・大塚浩・平山真理・松本克美他	235-250
3	松本 克美	Before/After 民法改正	共著	2017年9月	弘文堂	潮見佳男・松岡久和・松本克美他	84-91
4	相澤 育郎	刑罰制度改革の前に考えておくべきこと	共編著	2017年12月	日本評論社	武内謙治=本庄武編著	179-196
5	村本 邦子	父の逸脱	分担執筆	2017年9月	新泉社	セリーヌ・ラファエル、林昌宏訳	252-265
6	村本 邦子	私の中のわたしたち: 解離性同一性障害を生きのびて	共著	2017年9月	国書刊行会	オルガ・トゥルヒーヨ・伊藤淑子	329-345
7	村本 邦子	男性は何をどう悩むのか ~男性専用相談窓口から見る心理と支援	共著	2018年3月	ミネルヴァ書房	濱田智崇・「男」の悩みのホットライン(編)	45-57
8	北出 慶子	Chapter title: Do experiences of teaching abroad impact identity transformation in second-language	共著	2017年5月	International Society for Language Studies, Inc.	Keiko Kitade	15-38

		teachers? Book title: Readings in Language Studies, International Society for Language Studies					
9	北出 慶子	『TEMで広がる社会実装』担当章「ネイティブ日本語教師の海外教育経験は、教師成長を促すのか？」		2017年9月	誠信書房	サトウタツヤ・安田裕子（編著）	48-68
10	山浦 一保	「社会心理学的リーダーシップ研究のパースペクティブII」第4章：交換関係としてのリーダーシップ	共著	2017年11月	ナカニシヤ出版	坂田桐子（編著）： 山浦一保 他4名	83-107
11	三田村 仰	臨床心理学第17巻第4号 一必携保存版 臨床心理学 実践ガイド	分担執筆	2017年7月	金剛出版	岩壁茂（責任編） 『臨床心理学』編集 委員会（編）。（担 当：分担執筆，三田 村 仰 ケースフォ ーミュレーション）	422-423
12	三田村 仰	はじめてまなぶ行動療法	単著	2017年8月	金剛出版	三田村仰	
13	三田村 仰	使いこなすACT(アクセプ タンス&コミットメント・ セラピー) ラス・ハリス (担当:共訳)	監修	2017年9月	星和書店		
14	サトウタツ ヤ	Imagination in Adults and the Aging Person: Possible Futures and Actual Past. In Tania Zittoun and Vlad Glaveanu (Eds.) Handbook of Imagination and Culture. Chapter 9.	共著	2017年6月	Oxford University Press	Tania Zittoun and Tatsuya Sato	187-207
15	サトウタツ ヤ	TEMでひろがる社会実装 ーライフの充実を支援する	共編著	2017年8月	誠信書房	安田裕子・サトウタ ツヤ	254
16	安田 裕子	生みだされる分岐点ー変容 と維持をとらえる道具立て (安田裕子・サトウタツヤ (編), TEMでひろがる社 会実装ーライフの充実を支 援する)	単独	2017年8月	誠信書房	安田裕子	11-25
17	安田 裕子	TEMでひろがる社会実装ー ライフの充実を支援する	共編著	2017年8月	誠信書房	安田裕子・サトウタ ツヤ	
18	安田 裕子	子どもの司法面接とケア (指宿信（編），犯罪被害 者と刑事司法)	単独	2017年9月	岩波書店	安田裕子	192-209



19	安田 裕子	教育実践の質的研究方法 (田中俊也(編), 教育の方法と技術—学びを育てる教室の心理学)	単独	2017年10月	ナカニシヤ出版	安田裕子	175-195
20	神崎 真実	通信制高校のすべて—「いつでも、どこでも、だれでも」の学校	分担執筆	2017年5月	彩流社	手島純(編)	89-105, 107-122
21	堀江 未来	Faculty Training for Non-Native Speakers of English at Japanese Universities: Effective English-Medium Teaching for a Culturally Diversified Student Population. In Bradford, A. & H. Brown (eds). English-Medium Instruction in Japanese Higher Education: Policy, Challenges and Outcomes.	共著	2018年1月	Multilingual Matters, Bradford, A. & H. Brown (eds) (2016). English-Medium Instruction in Japanese Higher Education: Policy, Challenges and Outcomes.	Miki Horie	207-224
22	湯浅 俊彦	大学生が考えたこれからの出版と図書館—立命館大学文学部湯浅ゼミの軌跡	編著	2017年4月	出版メディアパル		
23	湯浅 俊彦	読書の自由と図書館—石塚栄二先生卒寿記念論集	分担執筆	2017年9月	日本図書館研究会	石塚栄二先生の卒寿をお祝いする会編	
24	三田村仰	臨床心理学第17巻第4号—必携保存版 臨床心理学実践ガイド	分担執筆	2017年7月	金剛出版	岩壁茂(責任編) 『臨床心理学』編集委員会(編). (担当: 分担執筆, 三田村仰 ケースフォーミュレーション)	
25	三田村仰	はじめてまなぶ行動療法	単著	2017年8月	金剛出版	三田村仰	
26	三田村仰	使いこなすACT(アクセプタンス&コミットメント・セラピー) ラス・ハリス (担当: 共訳)	監修	2017年9月	星和書店		
27	松原洋子	「生殖医療」、アメリカ学会編『アメリカ文化事典』	単著	2018年1月	丸善出版		
28	立岩真也	『リハビリテーション/批判—多田富雄/上田敏/…』	編著	2017年7月	Kyoto Books	立岩真也編	
29	立岩真也	『社会が現れるとき』	共編著	2018年2月	東京大学出版会	若林幹夫・立岩真也・佐藤俊樹	

2. 論文								
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	中村 正	子どもを虐待する父親のグループワーク	単著	2017年10月	精神療法(43巻5号)	中村正	71-75	
2	森久 智江	「犯罪行為者の社会復帰支援」から「人が『生きる』を支える」のために：障害者権利条約における人権概念と人権価値の転換による示唆(土井政和教授 退職記念論文集)	単著	2017年12月	法政研究(84巻3号)	森久智江	751-780	
3	森久 智江	オーストラリア・ニューサウスウェールズ州(NSW)における矯正医療の現状と日本への示唆	単著	2018年3月	矯正講座(37号)	森久智江		
4	森久 智江	「再犯防止」と「自由刑の単一化」	単著	2018年3月	犯罪と刑罰(27号)	森久智江		
5	林 勇吾	Compound effects of expectations and actual behaviors in human-agent interaction: Experimental investigation using the Ultimatum Game	共著	2017年7月	Proceedings of the 39th Annual Conference of the Cognitive Science Society(CogSci2017)	Hayashi, Y. Okada, R.	2168-2173	
6	林 勇吾	信頼構築プロセスが協同問題解決の視点取得に及ぼす影響：エージェントを利用した実験的検討	単著	2017年7月	人工知能学会論文誌(32巻4号)	林 勇吾	E-G91_1-9	
7	林 勇吾	Effect of Human Agent Interaction Improves Self-esteem and Students' Motivation	共著	2017年7月	Proceedings of the 6th International Congress on Advanced Applied Informatics (AAI-2017)	Rienovita, E. Taniguchi, M. Kawahara, M. Hayashi, Y. Takeuchi, Y.	1-7	
8	林 勇吾	Lexical Entrainment Toward Conversational Agents: An Experimental Study	共著	2017年10月	Proceedings of the 4th international conference on Human-Agent Interaction (HAI2017)	Hoshida, M. Tamura, M. Hayashi, Y.	189-194	

		on Top-down Processing and Bottom-up Processing						
9	林 勇吾	An Experimental Investigation on Using Pedagogical Conversational Agents: Effects of Posing Facilitation Prompts in Oral-Based Peer Learning	単著	2017年12月	Proceedings of the 25th International Conference on Computers in Education(ICCE2017)Workshop	Hayashi, Y.	454-460	
10	林 勇吾	知識統合型の協同学習における身体性を持つ教育エージェント：眼球運動測定を用いた助言と視線ジェスチャに関する実験的検討	単著	2018年2月	ヒューマンインタフェース学会論文誌(20巻1号)	林勇吾	79-88	
11	林 勇吾	Influence of robophobia on decision making in a court scenario: A preliminary experimental investigation using a simple jury task	共著	2018年3月	Proceedings of the 13th Annual ACM/IEEE International Conference on Human Robot Interaction (HRI2018) Companion	Hayashi, Y. Wakabayashi, K.	121-122	
12	林 勇吾	Implementation of Interactive Peer Learning Environment Enhances Learners' Self-Esteem and Self-Efficacy	共著	2018年3月	International Journal of Learning Technologies and Learning Environments(1巻1号)	Rienovita, E., Taniguchi, M., Kawahara, M., Hayashi, Y., Takeuchi, Y.	1-24	
13	林 勇吾	The power of a "Maverick" in collaborative problem solving: An experimental investigation of individual perspective taking within a group	単著	2018年5月	Cognitive Science Vol. 42(S1)	Hayashi, Y.	69-104	

14	林 勇吾	Gaze Feedback and Pedagogical Suggestions in Collaborative Learning: Investigation of Explanation Performance on Self's Concept in a Knowledge Integration Task	単著	2018年6月	Proceeding of the 14th International Conference on Intelligent Tutoring Systems(ITS2018), Lecture Notes in Computer Science, Springer-Verlag	Hayashi, Y.	78-87	
15	松本 克美	民事消滅時効への被害者学的アプローチー 児童期の性的虐待被害の回復を阻害しない時効論の構築のために	単著	2017年6月	被害者学研究(27号)	松本克美	30-41	
16	松本 克美	拘留所に収容された被拘留者に対する国の安全配慮義務の有無	単著	2017年7月	末川民事法研究(1巻)	松本克美	13-18	
17	松本 克美	土地工作物責任	単著	2017年11月	月刊司法書士(549号)	松本克美	35-39	
18	川端 美季	「清潔さは信心に次ぐ美德」という理念——被差別部落と公衆浴場運動	単著	2017年5月	部落解放(741号)	川端美季	76-83	
19	相澤 育郎	刑事施設における医療倫理の国際的スタンダード	単著	2017年6月	立命館人間科学研究(52号)	相澤育郎	55-66	
20	相澤 育郎	レイモン・サレイユにおける「刑の個別化」の思惟	単著	2017年12月	法政研究(84巻3号)	相澤育郎	159-190	
21	村本 邦子	周辺からの記憶15: 2014年度、宮城・岩手・民話との出会い	単著	2017年6月	対人援助学マガジン(8巻1号)	村本邦子	144-155	
22	村本 邦子	周辺からの記憶16: 2014年度 岩手	単著	2017年9月	対人援助学マガジン(8巻2号)	村本邦子	177-189	
23	村本 邦子	周辺からの記憶17: 2014年福島のこと	単著	2017年12月	対人援助学マガジン(8巻3号)	村本邦子	155-171	
24	村本 邦子	周辺からの記憶18: 2014年3月NYで	単著	2018年3月	対人援助学マガジン(8巻4号)	村本邦子	148-160	
25	北出慶子	韓国・中国留学経験の意味づけと就職活動ー一言語資本から非英語圏留学の学び	単著	2018年1月	『立命館経営学』(56巻5号)	北出慶子	115-135	

		を考えるー						
26	山浦 一保	The relationship between attractiveness of female legs and their anthropometric parameters: Judgments among male Japanese college students	共同	2017年	PLOS ONE	Kurihara, T., Otsu, K., Sanada, K., Yamaura, K.		
27	三田村 仰	ゲートウェイとしての「二人称」の科学ー武藤論文へのリブライー	単著	2017年5月	対人援助学研究(5巻)	三田村仰	31-33	
28	三田村 仰	Affective Neuroscience Personality Scale 日本語版の信頼性および妥当性の検討: 感情神経科学に基づいたパーソナリティへのアプローチ	共同	2017年9月	臨床心理学(17巻5号)	成田慶一・八田太一・平尾和之・三田村仰・山愛美・横出正之		
29	三田村 仰	Developing the functional assertiveness scale: Measuring dimensions of objective effectiveness and pragmatic politeness	単著	2018年	Japanese Psychological Research	Takashi Mitamura		
30	三田村 仰	Examining U.S. and Japanese college students' differences in psychological distress: The mediating roles of valued action and experiential avoidance.	共著	2018年	International Journal for the Advancement of Counselling.	Drake, C. E., Masuda, A., Dalsky, D., Stevens, K. T., Kramer, S., Primeaux, S. J., Muto, T., & Mitamura, T.		
31	中鹿 直樹	大学内模擬喫茶店舗における障害のある生徒のキャリア支援	単著	2017年12月	立命館人間科学研究	中鹿直樹		

32	サトウタツヤ	ローレッタ・ベンダー 心理学史の中の女性たち第3回	単著	2017年4月	心理学ワールド(77号)	サトウタツヤ	29	
33	サトウタツヤ	マミー・クラーク 心理学史の中の女性たち第4回	単著	2017年7月	心理学ワールド(78号)	サトウタツヤ	29	
34	サトウタツヤ	TEA(複線径路・等至性アプローチ)から見たキャリアの捉え方	共著	2017年9月	対人援助学マガジン(30号)	サトウタツヤ・川本静香	105-111	
35	サトウタツヤ	リタ・ホリングワース 心理学史の中の女性たち第5回	単著	2017年10月	心理学ワールド(79号)	サトウタツヤ	29	
36	サトウタツヤ	メアリー・エインスワース 心理学史の中の女性たち第6回	単著	2018年1月	心理学ワールド(80号)	サトウタツヤ	29	
37	澤野 美智子	共食が生み出される場：韓国農村「敬老堂」の事例から	単著	2018年2月	鈴木七美(編)日本学術振興会科学研究費助成事業成果公開集会報告書『超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ——ケアが照らし出すエイジング・イン・プレイスへ』	澤野美智子	67-86	
38	澤野 美智子	柿色の筆箱——植民地経験の複層性への視点	単著	2018年3月	立命館大学国際平和ミュージアムだより(25巻3号)	澤野美智子	9-10	
39	澤野 美智子	「ファッピョン」としての乳がん：韓国社会における女性と病気の関係	単独	2017年11月	韓国・朝鮮文化研究会第18回研究大会	澤野美智子		
40	土田 菜穂	特別支援学校における行動コンサルテーションの効果—教員の支援行動の変容に着目して—	共著	2018年2月	立命館人間科学研究(37号)	土田菜穂・中鹿直樹	125-135	
41	安田 裕子	体外受精適応となった女性の不妊経験への意味づけ過程—複線径路等至性モデリングを用いて(特集リプロダクションの経験と保健医療)	単著	2017年7月	保健医療社会学論集(28巻1号)	安田裕子	12-22	
42	安田 裕子	法と心理学会第17回大会 ワークショップ 多専門・多職種連携による司法面	共著	2017年10月	法と心理(17巻1号)	羽瀨由子・赤嶺亜紀・安田裕子・田中晶子・仲真紀子・三原恵・主田	47-54	

		接の展開—通達からの1年を振り返り、今後の展開を考える				英之		
43	神崎 真実	通学型通信制高校における「教育の時間」の事例研究—「通信」と「通学」が織りなす教育モデルの生成—	単著	2017年6月	平成28年度日本通信教育学会研究論集	神崎真実	1-15	
44	神崎 真実	高等学校における学校教育目標の内容分析—多様化と質保証はどのように展開しているのか—	単著	2017年7月	対人援助学研究(6巻)	神崎真実	103-115	
45	山口 洋典	PBLの風と土：(1)学びの環境をリフォームするという挑戦	単著	2017年6月	対人援助学マガジン(8巻1号)	山口洋典	248-253	
46	山口 洋典	PBLの風と土：(2)プロジェクトの機能より問題の存在が鍵	単著	2017年9月	対人援助学マガジン(8巻2号)	山口洋典	277-282	
47	山口 洋典	PBLの風と土：(3)専門性を高める学びと専門家への学び方	単著	2017年12月	対人援助学マガジン(8巻3号)	山口洋典	262-267	
48	山口 洋典	Discussion on Methodology to Go Up and Down Learning Stepladder Properly: From a Comparative Study of Supervision in PBL and Relationship Building in Service Learning	共著	2018年2月	Conference Proceedings of PBL2018 International Conference: PBL for Next Generation(10巻25号)	Hironori Yamaguchi, Mogens Jensen, Casper Feilberg	1-12	
49	山口 洋典	書評 TEMでひろがる社会実装—ライフの充実を支援する安田裕子・サトウタツヤ編著 精誠書房(2017年)	単著	2018年2月	ボランティア学研究(18巻)	山口洋典	141-144	
50	山口 洋典	PBLの風と土：(4)基本は急がば回れの学びでも時に近道を	単著	2018年3月	対人援助学マガジン(8巻4号)	山口洋典	242-247	
51	山口 洋典	サービス・ラーニングにおける「メモ	共著	2018年3月	立命館高等教育研究(18巻)	山口洋典・秋吉恵・宮下聖史・木	147-161	

		の書き方ガイド」 の導入—ジャーナ ルの厚い記述につ なぐために—				村充・河井亨		
52	堀江 未来	Local Students’ Views of English- Medium Courses in a Japanese Context	共著	2018年3月	立命館高等教育研究(18号)	Emiko Yukawa & Miki Horie		
53	松田 亮三	医療のアクセス障壁 —実態分析への接近 と状況把握について	単著	2017年6月	いのちとくらし研究所報(59 号)	松田亮三	1-9	
54	松田 亮三	日韓医療保険におけ る保険料賦課の課題	単著	2017年11 月	社会政策(9巻2号)	松田亮三	40-41	
55	松田 亮三	日韓における保険料 賦課をめぐる政策課 題の共通性と差異— 二か国の事例からの 問い、	単著	2017年11 月	社会政策(9巻2号)	松田亮三	68-72	
56	松田 亮三	刑務所の公衆衛生— 被収容者の健康課題 把握と戦略形成—	単著	2018年3月	矯正講座(37号)	松田亮三	239-262	
57	松田 亮三	医療福祉政策研究— 多様な課題とアプロ ーチを受け入れて	単著	2018年3月	医療福祉政策研究(1巻1号)	松田亮三	1-6	
58	斎藤 真緒	「勤労者教育」	単著	2017年7月	『京都新聞』(2017年7月5 日夕刊「現代のことば」)	斎藤真緒	1	
59	斎藤 真緒	「子ども・若者ケア ラー」	単著	2017年9月	『京都新聞』(2017年9月12 日夕刊「現代のことば」)	斎藤真緒	1	
60	斎藤 真緒	「平山亮著『介護す る息子たち—男性性 の視角とケアのジェ ンダー分析—』	単著	2017年10 月	『社会福祉研究』(130号)		132	
61	斎藤 真緒	「ケアラー支援」	単著	2017年11 月	『京都新聞』(2017年11月21 日夕刊「現代のことば」)	斎藤真緒	1	
62	斎藤 真緒	「デートDVとスマ ホ」	単著	2018年1月	『京都新聞』(2018年1月25 日夕刊「現代のことば」)	斎藤真緒	1	
63	竹内 謙彰	「三つの願い」質問 はどのような心的内 容に迫りうるのか	単著	2017年9月	立命館産業社会論集(53巻2 号)	竹内謙彰	63-75	
64	津止 正敏	介護者が前向きに生 きられる社会を		2017年5月	女性のひろば	津止正敏		
65	津止 正敏	家族介護者を支援す る—支援の根拠と枠 組み—	単著	2017年8月	老年精神医学雑誌(第28巻第 8号)	津止正敏	918-927	
66	津止 正敏	「介護」をめぐる課 題と展望⑥	単著	2017年9月	生産性新聞(第2539号)	津止正敏	7	



67	津止 正敏	男性介護者の支援のあり方や課題を聞く	単著	2018年1月	経団連タイムス(3346号)	津止正敏	2	
68	津止 正敏	男性が介護を問う意味—男女共同参画の時代を生きる—	単著	2018年2月	ぴゅあ(51号)	津止正敏	3	
69	土田 宣明	Age differences in variables affecting motor inhibition	単著	2017年7月	Japanese Psychological Research(59巻3号)	Tsuchida, N.	238-245	
70	松原 洋子	「『優生法の系譜論』批判の検討」	単著	2017年6月	『生物学史研究』(95号)	松原洋子	64-68	
71	松原 洋子	「大学図書館のアクセシビリティ—プリント・ディスアビリティの学生の支援を中心に」	単著	2018年3月	『館灯』(56号)	松原洋子	15-26	
72	立岩 真也	「生の現代のために・20—連載・132」	単著	2017年4月	『現代思想』(2017巻4号)	立岩真也		
73	立岩 真也	「高野岳志／以前生の現代のために・21—連載・133」	単著	2017年5月	『現代思想』(2017巻5号)	立岩真也	8-21	
74	立岩 真也	「高野岳志・1生の現代のために・22—連載・134」	単著	2017年6月	『現代思想』(2017巻6号)	立岩真也	16-28	
75	立岩 真也	「福島あき江 生の現代のために・23—連載・135」	単著	2017年7月	『現代思想』(2017巻7号)	立岩真也	8-19	
76	立岩 真也	「福島あき江／虹の会 生の現代のために・24—連載・136」	単著	2017年8月	『現代思想』(2017巻8号)	立岩真也		
77	立岩 真也	「引くべきところから引くこと(再度), 他」	単著	2017年8月	『病院・地域精神医学』(60巻1号)	立岩真也	24-27	
78	立岩 真也	「『障害／社会』準備の終わりから3—連載・137」	単著	2017年9月	『現代思想』(2017巻9号)	立岩真也		
79	立岩 真也	「どこから分け入るか—連載・138」	単著	2017年10月	『現代思想』(45巻)	立岩真也		
80	立岩 真也	「不如意なのに／だから語ること—連載・139」	単著	2017年11月	『現代思想』(45巻)	立岩真也		
81	立岩 真也	「斉藤貴男『健太さんはなぜ死んだか』	単著	2017年11月	『リハビリテーション』(2017巻11号)	立岩真也		

		一警官たちの「正義」と障害者の命」						
82	立岩 真也	「星加良司『障害と何か』の1—連載・140」	単著	2017年12月	『現代思想』(45巻)	立岩真也		
83	立岩 真也	「星加良司『障害と何か』の2—連載・141」	単著	2018年1月	『現代思想』(46巻)	立岩真也		
84	立岩 真也	「社会科学する(←星加良司『国家とは何か』の3—連載・142」	単著	2018年2月	『現代思想』(46巻)	立岩真也		
85	立岩 真也	「事実への信仰—ディテールで現実に抵抗する」	共著	2018年2月	『現代思想』(46巻)	荻上チキ・立岩真也・岸政彦		

3. 研究発表等					
No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1	中村 正	JAPANESE STYLE OF THERAPEUTIC JURISPRUDENCE II:HOW CAN WE PUT THE NEW WINE INTO THE OLD BOTTLE?: Some Significant Points of Considering Japanese Experience of Therapeutic Jurisprudence for Developing Theory and Practice in Diversity	2017年7月	International Academy of Law and Mental Health, XXXVth International Congress on Law and Mental Health	Tadashi Nakamura
2	中村 正	アディクションからの回復支援のネットワークの可能性—司法と福祉、理論と実践は、分かりあえるのか?	2017年9月	第2回犯罪学合同大会・公開シンポジウム	中村正
3	大谷 いづみ	「「生きるに値しない生命」殺害の医療化と規範化」	2017年11月	第36回医学哲学・倫理学会大会 ワークショップ「正常さと異常さの境界」	大谷いづみ
4	稲葉 光行	Collaborative Serious Games as a Mediatlional Means for Cross-Cultural Learning	2017年4月	Megatrends and Media 2017	Mitsuyuki Inaba
5	稲葉 光行	Research for the bias in the fact finding process in view of different interrogation techniques and camera angles	2017年5月	European Association of Psychology and Law Conference 2017	Yuko Yamasaki, Naoko Yamada, Ibusuki Makoto, and Mitsuyuki Inaba

6	稲葉 光行	A Consideration on Plea-Bargaining-like Interrogation as Cause of False Charge in Japan	2017年7月	International Symposium Psychology in Law for the Plea-Bargaining System	
7	稲葉 光行	Implementing Collaborative Serious Game on Japanese Culture based on Restored Historical Structures and Landscapes in the 3D Metaverse	2017年8月	Replaying Japan 2017	
8	稲葉 光行	Overview of Innocence Project Japan	2017年9月	Melbourne University Summer School in Kyoto	Mitsuyuki Inaba
9	稲葉 光行	Multidisciplinary Work in Wrongful Conviction Cases - Issues on Innocence Efforts in Japan	2017年12月	11th East Asian Association of Psychology and Law Conference	Mitsuyuki Inaba
10	稲葉 光行	Children-Centered Activity for Community Development in Japan	2018年3月	UCLinks Conference 2018	Mitsuyuki Inaba
11	森久 智江	「多様化する依存と政策：嗜癖・嗜虐の理論・政策・実践の統合をめざして」	2017年6月	日本公共政策学会大会	中村正、石塚伸一、西村直之、五十嵐弘志、出原和宏、森久智江、土山希美枝
12	森久 智江	「医療少年院・少年鑑別所」	2017年7月	一般社団法人よりそいネットおおさか（大阪府地域生活定着支援センター受託団体）2017(29)年度 大阪府福祉基金地域福祉振興助成金事業2017年度第1回よりそいセミナー	金子剛士、伊沢奈保美、古川輝、森久智江
13	森久 智江	「社会復帰」とは何か？一人が「生きる」を支えるために一	2017年8月	2017（平成29）年度近畿弁護士連合会人権擁護委員会夏期研修会「罪を問われた人の更生～再び地域社会で生きていく権利の実現のために弁護士ができること～」	森久智江
14	森久 智江	Lecture 1; The Framework of Japanese Criminal Justice System.	2017年9月	Melbourne University Summer School in Kyoto	Chie Morihisa
15	森久 智江	「少年院出院後の地域生活」	2017年9月	一般社団法人よりそいネットおおさか（大阪府地域生活定着支援センター受託団体）2017(29)年度 大阪府福祉基金地域福祉振興助成金事業2017年度第2回よりそいセミナー	高橋康史、田中康正、森久智江
16	森久 智江	制度の隙間に落ち込んだ子どもたちのために何が出来るか	2017年11月	特定非営利活動法人・チェンジングライフ活動報告会「制度の隙間に落ち込んだ子どもたちの支援を考える」	山田真紀子、林功三、小山定明、西原実、木下裕一、原田和明、森久智江
17	森久 智江	「当事者から学ぶ、自立へ	2017年11月	一般社団法人よりそいネットおおさか	野田詠氏、野木大輝、森久智江

		のヒント」		(大阪府地域生活定着支援センター受託団体) 2017(29)年度 大阪府福祉基金地域福祉振興助成金事業 2017 年度 第3回よりそいセミナー	
18	森久 智江	刑罰制度はどう変わる?～ 法制審少年法・刑事法部会 の議論状況 I (全体像)～	2017 年 11 月	京都弁護士連合会刑事弁護委員会勉強 会「刑罰制度はどう変わる?」	森久智江
19	森久 智江	少年審判の流れー少年法つ て何のためにあるの?	2018 年 2 月	2017 年度よりそい専門研修会	森久智江
20	森久 智江	育ちを剥奪された人	2018 年 2 月	非行・犯罪行為に至った知的障害者を 支援し続ける人のための双方向参加型 研修会	脇中洋、水藤昌彦、森久智江
21	松本 克美	改正民法の特徴と課題	2017 年 6 月	立命法曹会勉強会	松本克美
22	松本 克美	不動産取引における不法行 為責任	2017 年 11 月	第 27 回日韓土地法学会大会	松本克美
23	松本 克美	民法改正と建築瑕疵責任	2017 年 11 月	欠陥住宅被害全国協議会第 43 回名古屋 大会	松本克美
24	相澤 育郎	自由刑の比較研究「フラン スの制度について」	2017 年 6 月	刑事立法研究会全体会	
25	相澤 育郎	刑事施設医療に関する市民 意識調査の結果：医療水準 と医療保険制度への加入を めぐって	2017 年 10 月	日本法と心理学会第 18 回大会	
26	相澤 育郎	Prison Health-Care Attitude: Public understanding of prison health-care services	2017 年 12 月	11th East Asian Association of Psychology and Law Conference in Taiwan	Ikuo Aizawa
27	相澤 育郎	Andres Lehtmetts and Jörg Pont “Prison health care and medical ethics: A manual for health-care workers and other prison staff with responsibility for prisoners’ well-being”	2017 年 12 月	刑法読書会年末集中例会 (第 566 回)	相澤育郎
28	村本 邦子	Post Disaster Community Support with Family Manga Exhibition as a Tool for Intervention and Outreach: Reflection on the Past Five years from a Narrative Perspective	2017 年 5 月	19th International Conference on Community Psychology and Mental health	Kuniko Muramoto, Tadashi Nakamura, and Shiro Dan
29	村本 邦子	災害と女性	2017 年 10 月	平成 29 年度全国婦人相談員・心理判 定員研究協議会貴重講演	

30	村本 邦子	性暴力支援に求められること	2017年10月	平成29年度全国婦人相談員・心理判定員研究協議会分科会	村本邦子
31	岡本 尚子	除法筆算観察時における教師の視線特徴	2017年5月	第35回日本生理心理学会大会	岡本尚子, 黒田恭史
32	岡本 尚子	空間性系列順序記憶を担う神経基盤の検討	2017年5月	第35回日本生理心理学会大会	肥後克己, 岡本尚子, 苧阪満里子
33	岡本 尚子	Laterality Index plot of NIRS data clearly indicates the difference of the brain activation during Kraepelin performance test and the 2-digit calculation test	2017年6月	14th ICB Polish-Japanese Seminar on Biomedical Engineering	Hideo Eda, Madoka Yamazaki, Naoko Okamoto, Yasufumi Kuroda
34	岡本 尚子	Pre-service teachers' eye movements while observing children's calculation process	2017年6月	International Conference on Interdisciplinary Social Sciences	Naoko Okamoto, Yasufumi Kuroda
35	岡本 尚子	教師の計算観察過程における着眼点—視線計測による大学生との比較をとおして—	2017年9月	数学教育学会2017年度秋季例会	岡本尚子, 黒田恭史
36	岡本 尚子	生理学的手法を用いて、教育を科学的に考える	2017年9月	けいはんなオープンイノベーションセンター第9回大学リレーセミナー	岡本尚子
37	岡本 尚子	空間性ワーキングメモリ課題遂行時の方略利用	2017年9月	日本心理学会	肥後克己, 岡本尚子
38	岡本 尚子	学習観察時における指導者の着眼点—現職教員と教員志望学生の違い—	2017年10月	日本・中国 数学教育国際会議	岡本尚子
39	岡本 尚子	Increase of the deoxyHb calculated by NIRS indicates artifact, that does not contradict BOLD theory of fMRI	2017年11月	Society for Neuroscience 2017	Hideo Eda, Madoka Yamazaki, Naoko Okamoto, Yasufumi Kuroda
40	岡本 尚子	We can know whether you are motivated or not by measuring brain activity	2017年11月	Society for Neuroscience 2017	Madoka Yamazaki, Hideo Eda, Naoko Okamoto, Yasufumi Kuroda
41	岡本 尚子	ICTを用いた算数教材制作における教員養成としての効果	2017年11月	日本教育実践学会第20回研究会	黒田恭史, 岡本尚子
42	岡本 尚子	順序情報の保持と処理に関わる脳活動の変化	2017年12月	日本ワーキングメモリ学会大会	肥後克己, 岡本尚子, 苧阪満里子
43	岡本 尚子	教師になっても折れない心・体・頭づくり	2017年12月	「学び続ける教員」をテーマとするシンポジウム「教師になっても折れない心・体・頭づくり」	岡本尚子
44	岡本 尚子	文章問題観察時の視線特徴—教職課程学生と非課程学	2018年3月	数学教育学会2018年度春季年会	岡本尚子, 黒田恭史, 鈴木麻希

		生の比較一			
45	北出 慶子	Impact of the local language on identity development among international students in an English-medium instruction program	2017年6月	International Society for Language Studies	Keiko Kitade
46	北出 慶子	TEMで広がる社会実装一言語を学ぶ・教える一	2017年9月	日本質的心理学会 年次大会	北出慶子
47	北出 慶子	「日本語教師はボランティアでやるものかなって」一大学生のキャリア発達から見る	2017年11月	日本語教育学会秋季大会	北出慶子
48	北出 慶子	日本語教師に関するイデオロギ一	一	一	一
49	北出 慶子	学びについての評価から学びのための評価へ一外国語・日本語教育における評価と授業設計一	2018年2月	神戸大学国際教育総合センター・コロッキアム	北出 慶子
50	斎藤 進也	ゲーミングビジュアライゼーションの人文的応用プロジェクト	2017年8月	ARC Days 2017	斎藤進也
51	斎藤 進也	Applying Game Design Technology in Visualization Case of VR-Timeline From Digital Humanities Perspective	2017年8月	Re-playing Japan 2017	Saito, S., Morita, S., Okude, S., Takeda, S., Iida, S., & Watanabe, S.
52	斎藤 進也	Social logs and visual design -Through design and implementation of "Toilet type UI" -], Re-playing Japan 2017, The strong national museum of play	2017年8月	Re-playing Japan 2017	Risa Nakajima, Shigenori Mochizuki and Shinya Saito
53	斎藤 進也	Report on Game Design Work Shop Using "Difficulty Adjsutment Engineering" and Narrative Engineering	2017年8月	Re-playing Japan 2017	Shosaku Takeda, Shinya Saito, Seiki Okude, Kazutoshi Iida, Shuji Watanabe
54	斎藤 進也	働き方改革とキャリアの多様化 ~キャリアの多様化実現に向けたテクノロジー一活用の可能性~	2017年9月	HR サミット2017	宮下太陽, 豊田香, 幸村友美, 斎藤進也
55	斎藤 進也	Twitter による刑事司法改革についての意見分析	2017年10月	法と心理学会 第17回大会	上村晃弘, 斎藤進也

56	斎藤 進也	「トイレ型UI」におけるソーシャルログの可視化と共有ー「コミッチケーション」の実践を通じてー	2018年3月	情報処理学会, インタラクション2018	中島理沙, 望月茂徳, 斎藤進也
57	山浦 一保	How business philosophy affects creative activities: The Inamori management case	2017年7月	15th European Congress of Psychology (ECP)	Yamaura, K., Kono, T., & Sato, T.
58	三田村 仰	ケーススタディ1:嘔吐恐怖を抱える20代女性への臨床行動分析	2017年9月	日本認知・行動療法学会第43回大会	三田村仰
59	三田村 仰	女子短大生に対するグループワークプログラム実践の試み(5)	2017年10月	日本教育心理学会第59回総会発表論文集	松原耕平・猪澤歩・森際考司・高岡しの・本岡寛子・大対香奈子・藤田昌也・三田村仰・林敬子
60	三田村 仰	シンポジウム3-09 臨床行動分析を現場で活かすーマインドフルネスと価値を視野に入れた認知行動療法	2017年11月	日本心理臨床学会第36回大会	首藤祐介・三田村仰・今野高志・瀬口篤史・柳沢博紀・松見淳子
61	中鹿 直樹	特別支援学校の教員による子どもの行動への「ポジティブな評価」の促進ー行動コンサルテーションを通してー	2017年9月	日本特殊教育学会第55回大会	土田菜徳・中鹿直樹
62	中鹿 直樹	行動的QOL再考:選択か, 拒否か, 随伴性か	2017年10月	日本行動分析学会第35回年次大会	高山仁志・中鹿直樹
63	中鹿 直樹	朝の準備行動に課題のある生徒に対する支援の検討ー特別支援学校における行動コンサルテーションを通してー	2017年11月	対人援助学会第9回大会	土田菜徳・中鹿直樹
64	中鹿 直樹	これがあればできる!障害のある個人による「できる」の拡大	2017年11月	対人援助学会第9回大会	吉尾玲美・鳥取直子・高山仁志・中鹿直樹
65	中鹿 直樹	障害のある個人の当事者参加による「できる」の拡大	2017年11月	対人援助学会第9回大会	鳥取直子・高山仁志・朝野 浩・土田菜徳・中鹿直樹
66	サトウタツヤ	How business philosophy affects creative activities: The Inamori management case.	2017年7月	15th European Congress of Psychology (ECP)	Yamaura, K., Kono, T., & Sato, T.
67	サトウタツヤ	The lay theory of medical therapy and psychotherapy for treatment of depression in Japanese university students	2017年7月	15th European Congress of Psychology (ECP)	Kawamoto, S & Sato, T.
68	サトウタツ	New perspective for	2017年8月	The 17th Biennial Conference of	Tatsuya Sato

	ヤ	cultural psychology: Object, Body and Self		The International Society of Theoretical Psychology	
69	サトウタツ ヤ	進学校教師の職業アイデン ティティをめぐる語り—所 属組織における葛藤と役割 の模索—	2017年9月	日本パーソナリティ心理学会第26回 大会	神崎真実・黄 信者・土元哲平・中田友 貴・川本静香・菅井育子・隅本雅友・ サトウタツヤ
70	サトウタツ ヤ	許容できない事象に対する 共感の構造—ロジャーズの 共感理論からみた「死にた い」に対する共感の困難さ —	2017年9月	日本パーソナリティ心理学会第26回 大会	川本静香・中妻拓也・サトウタツヤ
71	サトウタツ ヤ	許容できない事象に対する 共感の構造—コフト理論 からみた「死にたい」に対 する考察	2017年9月	日本質的心理学会第14回大会	中妻拓也・川本静香・サトウタツヤ
72	サトウタツ ヤ	不登校者の身体表現と教師 による呼応—不登校経験者 受け入れ校におけるフィー ルドワーク	2017年9月	日本質的心理学会第14回大会	神崎真実・サトウタツヤ
73	サトウタツ ヤ	当事者と倫理と研究者：医 療分野における質的研究の 貢献	2017年9月	日本質的心理学会第14回大会	サトウタツヤ
74	サトウタツ ヤ	「TEM 図の描き合い」によ る「転機」経験の反省的考 察	2017年9月	日本質的心理学会第14回大会	土元哲平・サトウタツヤ
75	サトウタツ ヤ	「TEMで広がる社会実装」 の可能性	2017年9月	日本質的心理学会第14回大会	サトウタツヤ
76	サトウタツ ヤ	チュートリアル TEA (複 線径路等至性アプローチ)	2017年9月	日本心理学会第81回大会	サトウタツヤ
77	サトウタツ ヤ	病名と症例からみるアルコ ール依存症に対するイメー ジ	2017年9月	日本心理学会第81回大会	川本静香・中田友貴・生内瑠子・サト ウタツヤ
78	サトウタツ ヤ	心理学における共感研究の 復興 —アメリカにおける 心理学, 文化人類学との関 連—	2017年9月	日本心理学会第81回大会	中妻拓也・サトウタツヤ
79	サトウタツ ヤ	ナラティブの意義と可能性	2018年3月	第4回言語文化教育研究会	サトウタツヤ
80	サトウタツ ヤ	「TEA (複線径路等至性ア プローチ) の理論と実際」 (講義及び事例発表とコメ ント)	2018年3月	沖縄心理学会	サトウタツヤ
81	サトウタツ ヤ	健康生成論と「一貫性の感 覚」の重要性 被災地の 復興の人生径路を考えてみ る	2018年3月	日本発達心理学会第29回大会	サトウタツヤ



82	サトウタツヤ	TEMが拓く保育者の子ども理解と専門家としての育ち合いー「協働型」園内研修をデザインする	2018年3月	日本発達心理学会第29回大会	サトウタツヤ
83	谷 晋二	Measuring Japanese self-concept using the Implicit Relational Assessment Procedure	2017年5月	The Psychological Society of Ireland Division of Behavior Analysis	Shinji TANI
84	谷 晋二	The effect of ACT WS for Teachers and Staffs working for Children Having Disabilities II	2017年6月	ACBS Annual World Conference 15	Shinji TANI and Kotomi KITAMURA
85	谷 晋二	Japanese Version of Child and Adolescent Mindfulness Measure: Development and Examination of its Reliability and Validity	2017年6月	ACBS Annual Conference 15	Yuka HIRAMATSU and Shinji TANI
86	谷 晋二	ACT(アクセプタンス&コミットメント・セラピー)の最前線	2017年9月	日本認知・行動療法学会第43回大会	谷 晋二
87	谷 晋二	ACT Matrix and Mastering the Clinical Conversationを学ぶ	2018年3月	ACT Japan 2017年度 年次ミーティング	
88	土田 菜穂	特別支援学校の教員による子どもの行動への「ポジティブな評価」の促進ー行動コンサルテーションを通してー	2017年	日本特殊教育学会第54回大会	土田菜穂・中鹿直樹
89	土田 菜穂	朝の準備行動に課題のある生徒に対する支援の検討ー特別支援学校における行動コンサルテーションを通してー	2017年	対人援助学会第8回大会	土田菜穂・中鹿直樹
90	安田 裕子	看護学に TEM/TEA (複線径路等至性モデリング/アプローチ) はどう貢献できるか?	2017年8月	日本看護学教育学会第27回学術集会	伊東美智子・安田裕子・大野志保・中本明世・林田一子・大川聡子
91	安田 裕子	「TEMで広がる社会実装」の可能性	2017年9月	日本質的心理学会第14回大会	豊田香・北出慶子・伊東美智子・大川満里子・サトウタツヤ・安田裕子
92	安田 裕子	TEMが拓く保育者の子ども理解と専門家としての育ち合いー「協働型」園内研修をデザインする	2018年3月	日本発達心理学会第29回大会	中坪史典・境愛一郎・保木井哲史・サトウタツヤ・安田裕子
93	矢藤 優子	世界の子どもの幸福	2017年7月	立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 第3期拠点形成型	講演: Peg Barratt (George Washington University) 企画・総合司会: 矢藤優

				R-GIRO 研究プログラム「学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」/立命館大学人間科学研究所（いばらきコホートプロジェクト）/総合心理学部 共催による講演会	子
94	矢藤 優子	Nurturance in Young Children: Investigation using semi-structured interviews	2017年8月	the 4th International Conference on Education, Psychology, and Social sciences	Yato, Y.
95	矢藤 優子	乳幼児の集団保育場面における「かみつき」・「ひっかき」事例の発生について－年齢別に見た発生頻度や被害部位にも注目して－	2017年9月	日本心理学会第81回大会	矢藤優子・廣瀬翔平・山崎智美・杉本五十洋
96	矢藤 優子	デジタルペンを用いた描画プロセスにおける筆速変化の分析	2017年9月	日本心理学会第81回大会	廣瀬翔平・矢藤優子
97	矢藤 優子	保育施設における乳幼児の「かみつき」・「ひっかき」事例に関する継続的調査	2017年10月	第30回日本保健福祉学会学術集会	矢藤優子・廣瀬翔平・山崎智美・杉本五十洋
98	矢藤 優子	デジタルペンと描画解析ソフト (Elian)を用いた評価の試み	2017年12月	第41回日本高次脳機能障害学会学術総会	依光美幸・塚田賢信・天野京子・長尾卯乃・山田良治・廣瀬翔平・矢藤優子
99	矢藤 優子	Development and Relationship Between Performance and the Drawing Process on the Bender-Gestalt Test as Analyzed Using the Digital Pen	2018年3月	the 6th Asia Pacific Conference on Advanced Research	Yato, Y., Hirose, S., Wallon, P., Mesmin, C., & Jobert, M.
100	矢藤 優子	祖父母育児が幼児のパーソナリティおよび社会適応に及ぼす影響－中国での1年間縦断研究－	2018年3月	日本発達心理学会第29回大会	孫 怡・姜 娜・矢藤 優子
101	矢藤 優子	保育施設における「かみつき」・「ひっかき」事例の検討－保育者の記録に基づく発生状況・原因の分析から－	2018年3月	日本発達心理学会第29回大会	廣瀬翔平・矢藤優子・山崎智美・杉本五十洋
102	矢藤 優子	現代の中国における家族機能と子どもの心；留守児童，祖父母・保姆育児に関する問題への多様なアプローチ	2018年3月	日本発達心理学会第29回大会	矢藤優子・吉 沅洪・孫 怡・汪 為・姜 娜・連傑濤・呉薇莉
103	肥後 克己	空間性系列順序記憶を担う神経基盤の検討	2017年5月	第35回日本生理心理学会大会	肥後克己・岡本尚子・苧阪満里子

104	肥後 克己	空間性ワーキングメモリ課題遂行時の方略利用	2017年9月	日本心理学会第81回大会	肥後克己・岡本尚子
105	肥後 克己	Interactions Between the Default Mode Network and Executive Network in Older Adults.	2017年11月	Psychonomic Society 58th Annual Meeting.	Koshino, H., Osaka, M., Shimokawa, T., Minamoto, T., Kaneda, M., Yaoi, K., Azuma, M., Higo, K., and Osaka, N.
106	肥後 克己	順序情報の保持と処理に関わる脳活動の変化	2017年12月	第15回日本ワーキングメモリ学会大会	肥後克己・岡本尚子・荻阪満里子.
107	神崎 真実	進学校教師の職業アイデンティティをめぐる語り—所属組織における葛藤と役割の模索—	2017年9月	日本パーソナリティ心理学会第26回大会	神崎真実・黄 信者・土元哲平・中田友貴・川本静香・菅井育子・隅本雅友・サトウタツヤ
108	神崎 真実	不登校者の身体表現と教師による呼応—不登校経験者受け入れ校におけるフィールドワーク	2017年9月	日本質的心理学会第14回大会	神崎真実・サトウタツヤ
109	神崎 真実	なぜ子どもが立ち直ろうとするとときに「問題」は顕在化するのだろうか—「導かれた参加 (guided participation)」の視点から「問題」を「発達の契機」へ—	2017年10月	日本教育心理学会第59回総会	川俣智路・松嶋秀明・神崎真実・青山征彦・西山久子
110	山口 洋典	Communication-design for disaster risks through shopping at a large-scale shopping center: transition from disaster prevention to disaster mitigation	2017年8月	8th Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management	山口洋典・堀江尚子
111	山口 洋典	Transcend Counter-productivity in Japanese students' Reflection through Description Workshop: How to Cultivate the Habit of Articulated Learning	2017年9月	International Association for Research on Service-Learning & Community Engagement (IARSLCE) 2017 Conference	Hironori Yamaguchi, Mitsuru Kimura, Toru Kawai
112	山口 洋典	共感不可能性を前提とした被災地間支援の方法論の実践的研究：熊本と新潟を事例に	2017年9月	日本心理学会第81回大会	山口洋典・関嘉寛
113	山口 洋典	Discussion on Methodology to Go Up and Down Learning Stepladder Properly: From a Comparative Study of	2018年2月	PBL2018 International Conference	Hironori Yamaguchi, Mogens Jensen, Casper Feilberg

		Supervision in PBL and Relationship Building in Service Learning			
114	山口 洋典	集合知の観点から見たコミュニティのレジリエンス創出のための視点～支援の当事者が主体となるコミュニケーションデザインの実践事例から～	2018年3月	国際ボランティア学会第18回大会	宗田勝也・山口洋典
115	堀江 未来	大学英語科目開講 (EMI) における多言語使用	2017年6月	異文化間教育学会第38回大会	湯川笑子・堀江未来
116	堀江 未来	日本の大学における国際共修の取り組みとその展開：異文化間教育の視点から	2017年6月	異文化間教育学会第38回大会公開シンポジウム・東北大学グローバルイニシアティブセミナー	堀江未来
117	堀江 未来	立命館大学でのグローバル高大接続と入試・教育体制の整備：グローバルな志向をもった学生の獲得と育成	2017年9月	IDE 大学セミナー「大学のグローバルな高大接続戦略海外からいかに優秀な人材を受け入れるか」	堀江未来
118	堀江 未来	異文化体験を通じた学びと異文化感受性の発達	2018年1月	第4回教学実践フォーラム「留学を通じた学び～支援及びアセスメント～」	
119	松田 亮三	Hierarchy, market or network? Analysing governance of the Japanese mixed health care delivery	2017年6月	The 3rd International Conference on Public Policy (ICPP3)	Ryozo Matsuda
120	松田 亮三	Welfare State and Dying: A Case Study of Japan	2017年8月	The 14th East Asian Social Policy Research Network Annual Conference	Ryozo Matsuda
121	松田 亮三	Epidemiological Knowledge for local health policy making: Insights from the new public health system in England	2017年8月	The 21st World Congress of Epidemiology	Ryozo Matsuda
122	松田 亮三	諸外国の公衆衛生政策における健康格差指標	2017年11月	第76回日本公衆衛生学会	松田亮三
123	松田 亮三	医療福祉政策研究への多様なアプローチ	2017年12月	日本医療福祉政策学会第1回研究大会	松田亮三
124	松田 亮三	健康格差縮小に向けた公衆衛生活動～保健師への期待～	2018年1月	第6回日本公衆衛生看護学会学術集会	松田亮三
125	岡田 まり	集合方式による個人スーパービジョンプログラムの評価と課題～スーパーバイザーへのフォーカス・グループ・インタビューからの分析～	2017年7月	日本ソーシャルワーク学会第34回大会	片岡靖子、岡田まり、野村豊子
126	岡田 まり	集合方式による個人スーパー	2017年7月	日本ソーシャルワーク学会第34回大	岡田まり、野村豊子、片岡靖子

		ービジョニー社会福祉士のスーパーバイザー養成プログラムの開発と評価にむけてー		会	
127	斎藤 真緒	Peer Support Groups for Male Carers in Japan	2017年10月	7th International Carers Conference	斎藤 真緒
128	竹内 謙彰	自閉症スペクトラム児の多様性と自主性を尊重した療育プログラムの開発(10)ー幼児期：参加児の他者意識を高めるための見通しをもった遊びの工夫ー	2017年9月	日本自閉症スペクトラム学会第16回研究大会	小山田真理子・石田育子・富井奈菜実・松元佑・荒木美知子・荒木穂積・竹内謙彰
129	竹内 謙彰	自閉症スペクトラム児の多様性と自主性を尊重した療育プログラムの開発(11)ー小学校低学年：仲間意識を深めるための遊びの工夫とスタッフの関わり方ー	2017年9月	日本自閉症スペクトラム学会第16回研究大会	合川茉莉花・池永弥生・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰
130	竹内 謙彰	自閉症スペクトラム児の多様性と自主性を尊重した療育プログラムの開発(12)ー小学校高学年・中学生：参加児間の「ルール共有」と「協力」を重視した活動の工夫ー	2017年9月	日本自閉症スペクトラム学会第16回研究大会	
131	竹内 謙彰	思春期・青年期の自閉症スペクトラム児の療育プログラムの開発(その3)ー継続的な交流関係からみる自主性と協同性の変容の検討ー	2017年9月	日本自閉症スペクトラム学会第16回研究大会	中塚優介・麻生祐貴・平松祐佳・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰
132	津止 正敏	認知症に関わる当事者団体の役割と今後の課題	2017年4月	第32回国際アルツハイマー病協会国際会議	津止正敏他 座長：本間昭。発表者：伊藤美知、津止正敏、佐藤雅彦、長澤かほる、田部井康夫、杉野文篤、DY SUHARYA
133	津止 正敏	仕事と介護が両立するということー家族等を介護する男性社員の現状と支援の在り方についてー	2017年12月	一般社団法人日本経済団体連合会雇用政策委員会	津止正敏
134	星野 祐司	音楽聴取が言語的および空間的2-back課題におよぼす影響	2017年9月	日本心理学会第81回大会(発表論文集, p. 658)	星野祐司・坂本勝彦
135	星野 祐司	見慣れた対象に関する誤情報効果：提示回数の影響	2017年12月	日本基礎心理学会第36回大会	星野祐司
136	三田村 仰	ケーススタディ1：嘔吐恐	2017年9月	日本認知・行動療法学会第43回大会	三田村仰

		怖を抱える20代女性への 臨床行動分析			
137	三田村 仰	女子短大生に対するグループ ワークプログラム実践の 試み(5)	2017年10月	日本教育心理学会第59回総会発表論 文集	松原耕平・猪澤歩・森際考司・高岡し の・本岡寛子・大対香奈子・藤田昌 也・三田村仰・林敬子
138	三田村 仰	シンポジウム3-09 臨床行 動分析を現場で活かすーマ インドフルネスと価値を視 野に入れた認知行動療法	2017年11月	日本心理臨床学会第36回大会	首藤祐介・三田村仰・今野高志・瀬口 篤史・柳沢博紀・松見淳子
139	谷 晋二	Measuring Japanese self- concept using the Implicit Relational Assessment Procedure	2017年5月	The Psychological Society of Ireland Division of Behavior Analysis	Shinji TANI
140	谷 晋二	The effect of ACT WS for Teachers and Staffs working for Children Having Disabilities II	2017年6月	ACBS Annual World Conference 15	Shinji TANI and Kotomi KITAMURA
141	谷 晋二	Japanese Version of Child and Adolescent Mindfulness Measure: Development and Examination of its Reliability and Validity	2017年6月	ACBS Annual Conference 15	Yuka HIRAMATSU and Shinji TANI
142	谷 晋二	ACT(アクセプタンス&コミ ットメント・セラピー)の 最前線	2017年9月	日本認知・行動療法学会第43回大会	谷 晋二
143	谷 晋二	ACT Matrix and Mastering the Clinical Conversationを学ぶ	2018年3月	ACT Japan 2017年度 年次ミーティ ング	
144	土田 宣明	Finding the Meaning in Life Program for older adults: The pathway to Wonderful Aging	2017年7月	The 21th IAGG World Congress of Gerontology and Geriatrics	Kusaka, N., Narumoto, J., Tsuchida, N. et al.
145	土田 宣明	高齢者の抑制機能の特徴ー 運動抑制に注目してー(公 募型シンポジウム「抑制機 能の生涯発達」)	2017年9月	日本心理学会第81回大会	土田宣明
146	松原 洋子	方法論としての科学史を生 かした大学院教育ー学際 的大学院における院生指導 の実践から	2017年6月	日本科学史学会第64回年会	松原洋子
147	松原 洋子	引揚援護医療における人工 妊娠中絶の検討	2017年6月	日本科学史学会第64回年会	松原洋子
148	立岩 真也	"Achieving Independent Lives for People with ALS Connected to	2017年12月	The 28th International Symposium on ALS/MND	長谷川 唯; 増田 英明); 西田 美紀; 桐原 尚之; 川口 有美子; 立岩 真也

		Artificial Respirators through the Process of Accepting Care from Non-Family Members”			
149	立岩 真也	PA (Personal Assistance): Acquiring Public Expense and Seeking Self Management	2017年12月	Conference on Multi-Disciplinary Research of Disability Policy in China, 於: China (中国)・Wuhan 武漢	立岩真也

4. 主催したシンポジウム・研究会等					
No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1	えん罪救済センター&ニューヨーク大学合同シンポジウム	大阪いばらきキャンパス B棟 (立命館いばらきフューチャープラザ) 3階・コロキウム	2017年6月	189	主催: えん罪救済センター (Innocence Project Japan)・ニューヨーク大学 共催: 立命館大学 立命館グローバル・イノベーション研究機構 「修復的司法観による少子高齢化社会に寄り添う法・社会システムの再構築」プロジェクト/立命館大学 人間科学研究所 「えん罪救済センタープロジェクト」/法と心理学会
2	Peg Barratt 先生講演会	大阪いばらきキャンパス A棟 AC230	2017年7月	501	共催: 立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 第3期拠点形成型R-GIRO研究プログラム 「学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」(プロジェクトリーダー: 矢藤優子) / 立命館大学人間科学研究所 (いばらきコホートプロジェクト) /総合心理学部
3	国際混合研究法学会アジア地域会議/第3回日本混合研究法学会年次大会	大阪いばらきキャンパス B棟 (立命館いばらきフューチャープラザ)	2017年8月	189	主催: 国際混合研究法学会、日本混合研究法学会 共催: 立命館大学人間科学研究所
4	『テーマでひらく学びの扉 少子化社会と妊娠・出産・子育て』出版記念シンポジウム	京都市生涯学習総合センター山科 (アスニー山科) 実習室	2017年10月	-	主催: 立命館大学人間科学研究所 「インクルーシブ社会・医療サービスプロジェクト」
5	2017年度立命館大学人間科学研究所年次総会	大阪いばらきキャンパスB棟 (立命館いばらきフューチャープラザ) 1階・カンファレンスホール、C棟2階C271 ラーニングスタジオ	2017年12月	139	主催: 立命館大学人間科学研究所 特別協力: 立命館大学男女共同参画推進リサーチライフサポート室 実施協力: 立命館大学生存学研究センター/立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構 第3期拠点形成型R-GIRO研究プログラム 「学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」・「修復的司法観による少子高齢化社会に寄り添う法・社会システムの再構築」
6	絵本と音楽のコラボレーションの世界 ピクチャーブック ヒーリング (熊本地震・東日本大震災 復興支援チャリティーイベント)	聖心インターナショナルスクール ドゥシエインルーム	2017年12月	-	主催: 立命館大学人間科学研究所絵本プロジェクト/聖心インターナショナルスクール 後援: 立命館大学応用人間科学研究科 協賛: サントリーホールディングス株式会社/株式会社銀座十字屋/三菱UFJモルガン・スタンレー証券株式会社/株式会社アップルファーム
7	リハビリテーションの歴史・研究会	キャンパスプラザ 京都6階第一講習室	2018年1月	-	主催: 立命館大学人間科学研究所 「インクルーシブ社会・医療サービスプロジェクト」

8	人間科学研究所 CBS プロジェクト研究会	立命館大学衣笠キャンパス 創思館 303・304	2018年3月	-	主催：立命館大学人間科学研究所「CBS プロジェクト」
9	男性介護者と支援者の全国ネットワーク発足9周年イベント&第10回総会	京都タワーホテル 9F 飛雲の間・立命館大学 衣笠キャンパス 末川記念会館	2018年3月	-	共催：男性介護者と支援者の全国ネットワーク/立命館大学人間科学研究所「男性介護研究会」
10	出生をめぐる倫理研究会	KYOTO de MEETING	2018年3月	-	主催：科学研究費補助金（特別研究員奨励費）「戦前戦中期日本と出産の医療化——都市部の医師常駐施設における出産の動向」研究代表者：由井秀樹 共催：立命館大学人間科学研究所「インクルーシブ社会・医療サービスプロジェクト」
11	第7回総合心理学セミナー Vivien Burr 教授来日記念招待講演	立命館大学大阪いばらきキャンパス B棟3階コロキウム	2018年3月	189	主催：立命館大学人間科学研究所/生存学研究センター 協力：立命館大学総合心理学部/立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究/機構第3期拠点形成型R-GIRO 研究プログラム「学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成」（代表・矢藤優子）/ 文部科学省私立大学研究ブランディング事業 後援：日本質的心理学会

5. その他研究活動（報道発表や講演会等）				
No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1	大谷 いづみ	「安楽死・尊厳死論の系譜と相模原障害者殺傷事件」（京都自由大学連続講座：相模原障害者殺傷事件）	京都社会文化センター	2017年7月14日
2	大谷 いづみ	「事件を生んだ「障害者はいらない」という考え方（優生思想）を考える——安楽死・尊厳死論の系譜と相模原障害者殺傷事件」	JCIL 居場所づくり勉強会 第47弾 日本自立生活センターセンター事務所（油小路）	2017年8月1日
3	大谷 いづみ	「優生思想と生命倫理——安楽死・尊厳死論の系譜と 相模原障害者殺傷事件」	社会福祉法人京都国際社会福祉協力会 2017年度研修講座「事例から学ぶソーシャルワーク」於：京都国際社会福祉センター	2017年9月20日
4	稲葉 光行	2017年度・八幡市における子どもを中心とした地域の学びとコミュニティ活性化の支援活動実践	八幡市ふるさと学習館、八幡市文化センター	2017年4月1日～2018年3月31日
5	稲葉 光行	共に遊び学ぶためのゲーム～協調的シリアスゲームの可能性	立命館大学土曜講座	2017年5月13日
6	稲葉 光行	日本学術振興会主催イベント・ひらめき☆ときめきサイエンス「模擬裁判に参加して被告人に対する判決を考えてみましょう」	京都府・立命館大学朱雀キャンパス	2017年8月19日
7	稲葉 光行	特集「バイアスと冤罪—日本版イノセンス・プロジェクトの実践に向けて」企画趣旨	法と心理	2017年10月1日
8	稲葉 光行	あの人に迫る 稲葉光行 えん罪救済センター代表	中日新聞	2017年10月27日
9	稲葉 光行	視点・論点「“イノセンスプロジェクト”の可能性と課題」	NHK 総合	2017年11月21日



10	稲葉 光行	科学の力でえん罪を晴らせ	α-Synodos vol.239	2018年3月2日
11	村本 邦子	「性暴力被害女性が支援団体：苦しみ抜け出せる」コメント	南日本新聞	2017年1月30日
12	村本 邦子	NHK おはよう日本 けさのクローズアップ「子どもへの期待 なぜ虐待に？」取材協力・出演	NHK	2017年12月20日
13	村本 邦子	中日子どもウィークリー親の時間子の時間「話し合うきっかけに」	中日子どもウィークリー	2018年1月13日
14	村本 邦子	中日子どもウィークリー親の時間子の時間「未来を開く好きなこと」	中日子どもウィークリー	2018年2月10日
15	村本 邦子	中日子どもウィークリー親の時間子の時間「早く！早く！」	中日子どもウィークリー	2018年3月10日
16	サトウタツヤ	日本心理学会 高校生のための心理学講座	大阪大学	2017年12月17日
17	サトウタツヤ	第2回 双葉郡住民実態調査 調査報告書	うつくしまふくしま未来支援センター	2018年1月31日
18	サトウタツヤ	個人、家族、地域における「一貫性の感覚」の重要性 健康生成論をベースに被災地の復興の人生径路を考えてみる	立命館大学（土曜講座）	2018年3月3日
19	サトウタツヤ	書流言か 文化創造か？ 万歳三唱令を考える	熊本日日新聞 文化面	2018年3月10日
20	澤野 美智子	シンポジウム「証言・告白・愁訴—医療と司法における語りの現場から」共同企画・司会	—	2017年11月11日
21	安田 裕子	日本学術振興会特別研究員申請 申請内容ファイル作成のポイント（講習会）	茨木市・立命館大学、2018年度 日本学術振興会特別研究員申請ガイダンス	2017年4月3日
22	安田 裕子	日本学術振興会特別研究員申請 申請内容ファイル作成のポイント（講習会）	茨木市・立命館大学、2018年度 日本学術振興会特別研究員申請ガイダンス	2017年4月4日
23	安田 裕子	メンタルヘルス研修—心身ともに健やかに働くために	茨木市・立命館大学、2017年度新人職員研修	2017年10月16日
24	安田 裕子	パネルディスカッション	草津市・立命館大学、立命館グローバル・イノベーション研究機構（R-GIRO）第3期R-GIRO研究プログラム キックオフシンポジウム「人口減少の2060年問題解決へ—少子高齢化を新しい視点でデザインする」	2017年6月23日
25	安田 裕子	グループ演習「円卓の手法を用いて」（実務家研修）	立命館大学大阪いばらきキャンパス C272・271 ラーニングスタジオ、多専門連携による司法面接の実施を促進する研修プログラムの開発と実装（研究代表者：仲真紀子）主催 「司法面接と多機関連携検討会—心身のケアと事実確認の連携」	2017年7月29日
26	安田 裕子	メンタルヘルス研修—心身ともに健	茨木市・立命館大学、2017年度新人職員研修	2017年10月16日

		やかに働くために	(中途採用)	
27	安田 裕子	人生の径路と分岐点の観点から一人の多様性・複線性をとらえる質的研究法 TEM を下敷きに、生涯発達心理学を背景に (パネルディスカッション)	茨木市・立命館大学、2017 年度立命館大学人間科学研究所年次総会「研究者のライフ・イベントとワーク・ライフ・バランス」	2017 年 12 月 10 日
28	安田 裕子	司法面接と心身のケアの連携 実務家研修 質問票回答集	RISTEX 「安全な暮らしをつくる新しい公/私空間の構築」研究開発領域 研究代表者仲真紀子「多専門連携による司法面接の実施を促進する研修プログラムの開発と実装」(2016 年度～2018 年度) 研究助成	2018 年 1 月
29	安田 裕子	人生径路 (キャリア) と分岐点—生殖の困難を経験した女性の語り (ナラティブ) から、生涯発達心理学を背景に (講演)	大阪市・立命館大学、2017 年度 立命館大阪梅田キャンパス講座「総合心理学」シリーズ: 総合心理学の可能性	2018 年 2 月 7 日
30	安田 裕子	複線径路等至性アプローチ (TEA) (講習会)	大阪市・関西大学、日本教育工学会 SIG-9 「質的研究」第 3 回目セミナー TEA (複線径路等至性アプローチ) を使った研究への第二歩「TEA を使った質的研究を学ぶ② ～次の一歩に進みたい貴方へ～」	2018 年 2 月 10 日
31	安田 裕子	過程と発生をとらえる質的研究の方法論 複線径路等至性アプローチ (TEA) —理論と TEM による実践 (講習会)	東京都千代田区・共立女子大学、共立女子大学大学院看護学研究科地域看護学分野 研究方法論ゼミ	2018 年 2 月 19 日
32	安田 裕子	不妊治療経験者の人生選択—ライフストーリーを捉えるナラティブ・アプローチ (講演)	茨木市・立命館大学、第 7 回総合心理学セミナー Vivien Burr 教授 来日記念招待講演 質的心理学と社会構築主義の視点—やまだようこ教授退職記念国際シンポジウム	2018 年 3 月 27 日
33	矢藤 優子	(公財) 京都産業 21・けいはんなオープンイノベーションセンター (KICK) 第 9 回「大学リレーセミナー」	学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成	2017 年 9 月 13 日
34	岡本 直子	臨床心理学の見地から心を考える～対処オプションの提案～	サンケイリビング新聞社 教育講演会	2017 年 7 月 2 日
35	岡本 直子	TFT (思考場療法) アルゴリズムレベル (初級) セミナー講師	立命館大学大阪茨木キャンパス	2017 年 8 月 26 日
36	岡本 直子	TFT (思考場療法) 診断レベル (中級) セミナー ファシリテーター		2017 年 10 月 28 日
37	岡本 直子	TFT (思考場療法) アルゴリズムレベル (初級) セミナー講師	立命館大学大阪茨木キャンパス	2017 年 10 月 28 日
38	岡本 直子	ゆず 2018 プロジェクト with 日本生命 公式メンバー	横浜市	2017 年 12 月 8 日 ～2018 年 3 月 31 日
39	岡本 直子	公認心理師現任者講習会講師 (日本心理研修センター主催)	立命館大学大阪茨木キャンパス	2018 年 2 月 12 日 ～2018 年 2 月 16 日
40	岡本 直子	TFT (思考場療法) アルゴリズムレベル (初級) セミナー講師	立命館大学大阪茨木キャンパス	2018 年 2 月 24 日 ～2018 年 2 月 25 日

41	岡本 直子	公認心理師現任者講習会講師（日本心理研修センター主催）	花園大学	2018年3月10日 ～2018年3月11日
42	松原 洋子	日本科学史学会 全体委員 和文誌編集委員会委員		2007年～
43	松原 洋子	日本科学史学会生物学史分科会『生物学史研究』編集委員		2007年～
44	松原 洋子	立命館大学研究倫理委員会委員		2010年～
45	松原 洋子	「電子図書館のアクセシビリティー ー音で検索し、音で読む電子図書館」	立命館大学プレスセミナー、立命館大学東京キャンパス	2017年4月10日
46	松原 洋子	「優生学の成り立ちと展開」	平成29年度滋賀県障害児者と父母の会連合会 総会・研修会講演、草津市・草津市立民交流 プラザ	2017年5月13日
47	松原 洋子	「論点：相模原殺傷1年 自分は 「正義」に疑問符を」	『毎日新聞』東京朝刊 11頁	2017年7月28日
48	松原 洋子	「私のリサーチライフ」	立命研究者の会	2017年9月15日
49	松原 洋子	「大学図書館のアクセシビリティー プリント・ディスプレイの学生の 支援を中心に」	2017年度私立大学図書館協会西地区部会東海 地区協議会研究会、東海学園大学	2017年11月10日
50	松原 洋子	パネルディスカッション「研究者と ワーク・ライフ・バランスの今後」 (企画・司会)	「研究者のライフ・イベントとワーク・ライ フ・バランス」、立命館大学人間科学研究所主 催、立命館大学大阪いばらきキャンパス	2017年12月10日
51	松原 洋子	「優生学と人間社会—生命科学の世 紀はどこに向かうのか」	ゲノム問題検討会議第5回シンポジウム	2018年2月18日
52	松原 洋子	「研究者のキャリアパスを考える」	第1回研究キャリアパス支援セミナー	2018年2月23日
53	松原 洋子	「本の電子化とアクセシビリティ」	国際ワークショップ「障害学生支援と情報アクセシビリティ」	2018年3月2日
54	松原 洋子	「優生主義の現在—医療技術・科学 技術と社会の関係史から」	特定非営利活動法人ネットワーク医療と人権シン ポジウム「生命を育む思想の今—相模原障 害者施設殺傷事件をきっかけに」	2018年3月11日

#### 6. 受賞学術賞

No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
1	林 勇吾	International Congress on Advanced Applied Informatics	Outstanding Paper Award		2017年7月

#### 7. 科学研究費助成事業

No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1	中村 正	親密な関係における暴力加害者の特徴と 暴力から離脱する過程の臨床社会学的研究	科研費 基盤(C)	2015年4月	2018年3月	代表
2	大谷 いづ み	生命倫理学・死生学における安楽死・尊 厳死論の変容とキリスト教の歴史的社会的影響	科研費 基盤(C)	2015年4月	2018年3月	代表

3	稲葉 光行	メタバースを用いた日本の伝統文化及び生活文化の状況学習支援環境に関する総合的研究	科研費 基盤(B)	2015年4月	2020年3月	代表
4	林 勇吾	協同学習におけるエージェントベースのリフレクションに関する総合的検討	科研費 基盤(C)	2016年4月	2019年3月	代表
5	松本 克美	修復的正義の観点からの<損害の可視化>を実現するための損害論の法心理学的再構築	科研費 基盤(C)	2016年10月	2019年3月	代表
6	金 成恩	生殖補助医療の法制度化による子の利益保護と家族形成の支援	科研費 若手(B)	2016年4月	2019年3月	代表
7	村本 邦子	レジリエンスを引き出す災害後のコミュニティ支援モデルの構築	科研費 基盤(C)	2016年4月	2019年3月	代表
8	若林 宏輔	裁判員裁判評議を想定した集団討議実験と大型模擬裁判による比較の試み	科研費 若手(B)	2016年	2018年	代表
9	林 勇吾	電子ネットワーク上における集団感情とバイアスに関する総合的検討	科研費 基盤(C)	2016年	2020年	代表
10	松本 克美	東北大地震放射能・津波被災者の居住福祉補償とコミュニティ形成ー法学・医学の対話	科研費 基盤(B)	2016年10月	2018年	分担
11	川端 美季	生命倫理学・死生学における安楽死・尊厳死論の変容とキリスト教の歴史的社会的影響	科研費 基盤(C)	2015年4月	2018年3月	分担
12	森久 智江	危険社会における終身拘禁者の社会復帰についての総合的研究：無期受刑者処遇の社会化	科研費 基盤(B)	2017年	2021年	分担
13	森久 智江	矯正施設における医療・健康・人権の社会的構成に関する比較法政策学的研究	科研費 基盤(B)	2015年	2017年	分担
14	森久 智江	刑事司法と福祉の連携に関する試行モデルの検証と制度設計のための総合的研究	科研費 基盤(A)	2014年4月	2017年	分担
15	岡本 尚子	視線と脳活動の同時計測による思考過程と思考負荷の可視化	科研費 若手(A)	2017年4月	2021年3月	代表
16	北出 慶子	日中韓の新型留学プログラムにおける言語文化教育の在り方と支援方法の提案	科研費 基盤(C)	2016年4月	2019年3月	代表
17	斎藤 進也	立方体型情報ビューアーによる視覚的データ管理手法の構築	科研費 基盤(C)	2015年4月	2018年3月	代表
18	中鹿 直樹	障害者のキャリア支援のためのポートフォリオとそれを拡充する実習場面の機能分析	科研費 基盤(C)	2015年4月	2018年3月	代表
19	谷 晋二	子どもと保護者のメンタルヘルスを支える教員研修プログラムの開発	科研費 基盤(C)	2014年4月	2018年3月	代表
20	安田 裕子	人の生の潜在性と可能性に接近するTEAー文化をとらえ、分岐をつくる	科研費 基盤(C)	2016年4月	2019年3月	代表
21	早川 岳人	「医療情報の高度利用による健康寿命予測推定モデルの構築と健康寿命の推計に関する研究」	科研費 基盤(C)	2015年4月	2019年3月	代表

22	孫 怡	祖父母の育児参加による幼児のパーソナリティ発達及び親子のQOLへの影響-日中比較	科研費 若手(B)	2017年4月	2020年3月	代表
23	山口 洋典	インター・コミュニティ・デザインとしての災害復興支援に関する実践的研究	科研費 若手(B)	2014年4月	2018年3月	代表
24	堀江 未来	国際教育プログラムの開発・普及・評価サイクルの構築：高大連携による学びの実質化	科研費 基盤(B)	2017年4月	2020年3月	代表
25	山浦 一保	崩壊した上司-部下の関係性を修復する組織及び職場の最適条件の解明	科研費 基盤(C)	2016年	2019年	代表
26	美馬 達哉	直流刺激と歩行運動のハイブリッド型リハによる下肢機能再建とその脳内機構の解明【繰越】	科研費 基盤(B)	2015年	2018年	代表
27	美馬 達哉	直流刺激と歩行運動のハイブリッド型リハによる下肢機能再建とその脳内機構の解明【2017】	科研費 基盤(B)	2015年	2018年	代表
28	美馬 達哉	発振操作による動的ネットワークの再組織化	科研費 新学術領域研究(研究領域提案型)	2015年6月	2020年3月	代表
29	矢藤 優子	生理指標を用いた親子の社会的関係性に関する縦断的研究：胎児期から幼児期にかけて	科研費 基盤(C)	2017年	2020年	代表
30	サトウタツヤ	母体胎児集中治療室入院妊婦のQOL向上と母親役割獲得に向けた看護ケアモデルの構築	科研費 基盤(C)	2015年4月	2017年	分担
31	サトウタツヤ	裁判員裁判の評議デザイン-評議におけるストーリーの構築過程と法実践手法の解明	科研費 基盤(B) (特設) (基金)	2017年7月	2019年	分担
32	安田 裕子	日中韓の新型留学プログラムにおける言語文化教育の在り方と支援方法の提案	科研費 基盤(C)	2016年4月	2018年	分担
33	早川 岳人	地域住民における詳細な認知機能検査結果と十年間の認知症、要介護リスクとの関連解析	科研費 基盤(C)	2016年4月	2018年	分担
34	堀江 未来	日中韓の新型留学プログラムにおける言語文化教育の在り方と支援方法の提案	科研費 基盤(C)	2016年4月	2018年	分担
35	堀江 未来	大学国際化マネジメントにおける教職協働の実証的研究	科研費 基盤(C)	2017年4月	2019年	分担
36	堀江 未来	東アジア高等教育におけるグローバル人材像と国際教育展開	科研費 基盤(C)	2014年4月	2017年	分担
37	美馬 達哉	臨床音楽による癒し感の生理・心理的定量化手法の開発-音楽併用リハビリテーション-	科研費 基盤(C)	2017年4月	2019年	分担
38	美馬 達哉	「老成学」の基盤構築 - <媒介的共助>による接続可能社会をめざして	基盤研究(B)特設	2015年	2018年	分担
39	美馬 達哉	脳卒中患者に対するVR技術を用いたトレッドミル歩行の効果と回復メカニズムの解明	科研費 基盤(C)	2017年	2019年	分担

40	松田 亮三	変動する社会における社会保障公私ミックスの変容—量質混合方法論による接近 【基金】	科研費 基盤(B)	2014年4月	2018年3月	代表
41	松田 亮三	変動する社会における社会保障公私ミックスの変容—量質混合方法論による接近 【補助金】	科研費 基盤(B)	2014年4月	2018年3月	代表
42	岡田 まり	社会福祉士のスーパーバイザー養成プログラムの開発と評価	科研費 基盤(B)	2015年4月	2019年3月	代表
43	斎藤 真緒	虐待・介護殺人予防としての男性介護者のピア・サポート活動の可能性と課題	科研費 基盤(C)	2016年4月	2019年3月	代表
44	津止 正敏	ケア包摂型コミュニティのダイナミズムと開発主体アソシエーションに関する臨床研究	科研費 基盤(C)	2016年4月	2019年3月	代表
45	谷 晋二	子どもと保護者のメンタルヘルスを支える教員研修プログラムの開発	科研費 基盤(C)	2014年4月	2018年3月	代表
46	立岩 真也	病者障害者運動史研究——生の現在までを辿り未来を構想する	科研費 基盤(B)	2017年4月	2020年3月	代表
47	土田 宣明	運動抑制に影響する要因の年齢差—エラーの原因は若年者と高齢者で異なるのか?	科研費 基盤(C)	2016年	2019年	代表
48	岡本 直子	幼児のファンタジーの体験および意味づけ—幼児と養育者の関わりの素材としての活用	科研費 基盤(C)	2016年	2020年	代表
49	中村 隆一	戦後における重度重複障害児教育実践の創成に関する歴史研究とアーカイブ化	科研費 基盤(B)	2016年	2020年	代表
50	松原 洋子	戦後日本の人工妊娠中絶の制度史：医療・人口・地政学	科研費 基盤(C)	2016年	2019年	代表
51	丸山 里美	婦人保護施設から見た戦後日本女性の貧困—貧困概念の再定義に向けて	科研費 基盤(B)	2015年	2017年	分担
52	丸山 里美	子どもの貧困に関する総合的研究：貧困の世代的再生産の過程・構造の分析を通して	科研費 基盤(A)	2016年	2019年	分担
53	丸山 里美	「女性の貧困」を捉える：世帯内資源配分に着目した実証研究の方法の開発	科研費 基盤(C)	2016年	2018年	分担
54	湯浅 俊彦	加藤周一を軸とした戦後日本思想の検証	科研費 基盤(B)	2017年	2019年	分担

#### 8. 競争的資金等(科研費を除く)

No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
1	岡本 尚子	助言が学習者に及ぼす情意的影響の生理学的分析	挑戦的萌芽研究	2016年4月	2019年3月	代表
2	サトウタツヤ	グローバリゼーション時代における新しい心理学史の叙述	挑戦的萌芽研究	2015年4月	2018年3月	代表
3	サトウタツヤ	医師のジェンダーの関与と、診療対話の視線と脳活動にみる、新しい医療交渉学の開発	挑戦的萌芽研究	2016年10月	2017年	分担
4	サトウタツヤ	大学生のキャリア発達プロセス可視化に	挑戦的萌芽研究	2016年4月	2018年	分担

	ヤ	よる自己形成の基礎研究と国際間比較				
5	安田 裕子	「司法面接と心理臨床の連携」	国立研究開発法人科学技術振興機構 受託研究	2015年11月	2018年3月	代表
6	早川 岳人	「社会的要因を含む生活習慣病リスク要因の解明を目指した国民代表集団の大規模コホート研究：NIPPON DATA80/90/2010」	厚生労働科学研究費補助金	2014年4月	2018年3月	分担
7	美馬 達哉	非線形発振現象を基盤としたヒューマン ネイチャーの理解	新学術領域研究	2015年10月	2019年	分担
8	立岩 真也	意思決定支援研究 ―その現状を知り、可能性を探り、未来を展望する―	公益財団法人 明治安田こころの健康財団 2016年度研究助成	2016年9月	2017年9月	代表
9	丸山 里美	Living on the Streets in Japan:Homeless Women Break Their Silence	学術図書	2017年	2018年	代表
10	丸山 里美	オルタナティブ家族で精子提供によって 出生した子の情報開示ジレンマに関する 研究	挑戦的萌芽研究	2017年	2020年	分担

9. 知的財産権								
No.	氏名	名称	出願人 区分	発明人 区分	出願番号	公開番号	登録（特許）番号	国
該当無し								